主 題：七つの教会への使信 1、エペソ教会、「愛が冷えた教会」

聖書箇所：黙示録 2章 1－7節

いよいよ私たちは黙示録の2章、3章を学んでいきます。ここには「七つの教会に宛てた主イエス・キリストの使信」、メッセージが記されています。もうすでに見て来たように、七つの教会は小アジア、今のトルコに現存していた教会です。これらの教会が抱えていた霊的な問題、また、彼らが受けた霊的称賛、それらはこの七つの教会だけに限定されたものではありません。彼らの霊的な問題は、時代を越えて、すべての教会が大なり小なり抱える問題です。また、霊的称賛は時代を越えてすべての教会が模範とするべきことです。私たちは自分自身を吟味するためにも、この使信をしっかりと受け止め真剣に向き合うことが必要です。それによって、私たちひとり一人が主が望んでおられる信仰者へと、また、そのような教会へと成長していくことができる大切なメッセージです。

まず、エペソの教会に宛てた主のメッセージを見ていきましょう。

☆エペソの教会へのメッセージ 2：1－7

A. 教会への使信 1節

1節「エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。』」と。

1. 宛先：「エペソにある教会の御使いに書き送れ。」

エペソにある教会の御使いに対するものです。

1) エペソにある教会の御使い

(1) **エペソ**：エペソの町について詳しい説明はしません。皆さんはよくご存じです。幾つかのことを思い出していただきたいのですが、エペソはその当時その地域において最大の都市でした。カイステル川の河口近くに位置し、大きな商業の中心地で非常に栄えていたことを私たちは歴史を通して学んでいます。このエペソには世界の七不思議と言われる大きな神殿がありました。アルテミス神殿と言われます。そこにあって人々はアルテミスという女神を崇拝していました。この女神アルテミスはローマ人にとってはダイアナと呼ばれた偶像でした。彼らはそのような偶像を崇拝していたのです。

パウロが第二次、第三次宣教の時にエペソに留まったり、第三次の時にはここに近いミレトという町にエペソ教会の長老たちを呼んだことが記されていて、非常に深い関わりをもっていました。実際に、パウロはこの町にどこよりも一番長く滞在しました。テモテがこの教会の最初の長老であったと言われています。アクラやプリスキラ、また、雄弁で知られたアポロが訪問した町でもあったようです。ですから、非常に大切な町でした。後にはヨハネがこの教会の指導者になったとも伝えられています。この教会にヨハネのメッセージが届くのです。

(2) **教会**：次に進む前に、ぜひ、「教会」ということを覚えてください。「教会」というと建物を思ってしまうのですが、これは「～の間から、～の中から呼ばれた、呼び出された者たち」という意味です。ですから、明らかに建物を指しているのではなく、建物の中にいるクリスチャンである私たちのことを言うのです。なぜなら、イエス・キリストを信じているすべての人たちは、神ご自身が罪の中から救い出してくださった、滅びの中から救い出してくださった、神があなたを呼び出してくださったからです。だから、あなたを「教会」と呼ぶのです。

(3) **教会の御使い**：このメッセージは「教会の御使い」に宛てて書かれたのですが、「御使い」とはもうすでに1：20で学びました。天使たちのことではなく、教会を代表する人たちを指しています。

2. 差出人：主イエス・キリストが主権者 1節

主イエス・キリストに関して『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。』と主ご自身が主ご自身について説明をしています。これも復習になりますが、

1) **七つの星**：「教会の霊的リーダー」のことです。牧師を含めた長老たちのことです。

2) **七つの金の燭台**：「教会」を指していました。

3) **右手**：神ご自身がすべてのものを支配しておられるということでした。

この1節に書かれている主イエスの象徴は1：13、16ですすでに見ました。1：13には「それらの燭台の真ん中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。」と、非常によく似た表現です。ただ違うのは「人の子」イエスが、1：13には「真ん中に立って」おられたとあり、2：1では「その間を歩く」とあります。何を言わんとしているのか？それは主ご自身が教会の間を動き回り、教会を注意深く見つめ観察しているということでした。私たちも部屋の中を動き回るといろいろ

なものが見えて来ます。主はこのエペソの教会の中のことを見まわして知っていると言うのです。

2節に「知っている。」ということばが2回出て来ますが、この「知っている」というギリシャ語は非常に意味のあることばを使っています。大きく二つのギリシャ語がありますが、一つは「ギノスコ」で、漸進的に知識を得ていくこと、徐々に知っていくことです。でも、ここではもう一つの「オイダ」というギリシャ語が使われていて「完全な知識」という意味があります。この「知っている」は2節の他にも2：9、13、19、3：1、8、15に使われています。

ですから、ここで主が言われていることは、エペソの教会を歩き回ってその教会のことを完全に知っているということです。教会の本当の状態をすべて正確に知っているということが言われているのです。主が知らないことは何一つないのです。すべてのことを正しく知っておられる主だから、正しい評価が下るのです。そのことをこのみことばは私たちに教えます。

先ず、だれがだれに対してこの手紙を送ったのか？そのことが記されていました。

B. 教会の評価 2-6節

「教会への評価」、称賛されているところと非難されているところがあります。

1. 称賛 : 教会の善いところが誉められている

それは彼らの「行い」でした。2節を見ると「わたしは、あなたの行いとあなたの労苦と忍耐を知っている。」と書かれています。ここに出て来る「行い」はこの後に出て来る四つのことをまとめて言いました。主はエペソ教会の「行い」を知っている、そして、それを高く評価しておられます。その「行い」はどのようなものか？四つのが記されています。

1) 主に**対する勤勉な歩み** : 「労苦」、これは「汗をかくまで働く、クタクタに疲れ果てる、疲れ切るまで働く」という意味を持っています。ですから、皆さんに連想していただきたいのは、ある人がもうクタクタになるまで働き続けている様子、それを表わしていることばがここで使われています。ですから、主がこのエペソ教会を見て彼らの行いを称賛しておられます。

* 彼らは主に**対して勤勉に熱心に働き続け、主に仕えた**

だから、主はそのことを喜ばれたのです。この教会のクリスチャンたちは恐らくほとんどの人たちが傍観者ではなかった、実際に、彼らは働きに加わって汗を流していたのです。彼らは見物人でも解説者でもなかったのです。解説者は言いたいことだけを言っています。批判するのは得意だが実際に自分は何もしないという、そういう信仰者ではなかったのです。勤勉な農夫だけが豊かな収穫を得ることが期待できます。このエペソのクリスチャンたちは、主が命じられた弟子を作ること、つまり、伝道して、その人たちにしっかりみことばを教えていくという働きにおいて、大変熱心だったのです。彼らは疲れ果てるまでその働きに没頭したのです。それを神は大いに喜ばれたと、そのことが最初に出て来ます。

2) 主に**信頼を置いた歩み** : 「忍耐」、この「忍耐」ということばについてバークレーは「すべてを宿命としてあきらめ、黙って我慢していることではない。あるいは、苦難に出会ったとき、頭を垂れてじっとしていることでもない。」と、そのような説明をしています。ですから、このことばは大変な問題があっても、大変な困難を経験しても立ち止まるのではなく、勇気をもって前に進んでいく、そのことを意味します。

* 苦難や困難を受け入れ、そして、忠実であり続けた。すばらしい信仰者たち、教会だった

彼らはどんなときにも神に信頼を置いて、神に従い続けていたのです。パウロがこのエペソ教会の様子を「エペソ人への手紙」に記しているのです、そこを見ましょう。エペソ1：15-16「:15 こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、:16 あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。」とパウロはエペソ教会のすばらしさを神に感謝していると、そのように記しています。何を感謝していたのか？二つのことが書かれています。

・ 彼らの主イエスに対する信仰＝彼らが常に神に信頼して、神を信じて歩んでいた

・ 兄弟たちに対する愛

ですから、エペソ教会のクリスチャンたちはどのようなときでも主を疑うことなく主を信頼して主に従い続けていたのです。このような歩みをしているクリスチャンたちの信仰生活は大変エキサイティングなものになります。どうしてか？確かに、毎日いろいろなことが訪れます。でも、聖書を通して教えられることは、その一つ一つの機会に神があなたに与えてくださっているということです。それはあなた自身が大切なレッスンを学ぶための機会です。私たちが主を信頼して、主の教えに従い続けていくなれば、その時その時に備えられたレッスンを学んでいきます。それによって、私たちが最も望んでいる神の栄光が現わされていきます。

ですから、いろいろなときに、日々の生活において「あなたのレッスンは何なのでしょう？主よ、この機会にあなたが備えてくださったレッスンをしっかり学べますように。」と、そのように主に信頼を置いて生きていくなれば、常に、神がどんなみわざを為してくださるのかと期待できます。だから、エキ

サイティングなのです。しかし、主を疑いながら歩んでいるなら、その人の生活には喜びではなく不安が付きまといまいます。感謝ではなく、常に、愚痴の多い不満いっぱいの生活を送ることになります。どちらを選択するか？です。エペソのクリスチャンたちはどんなときにも主を信頼しながら歩んでいました。パウロはそれを知ってそのことを神に感謝していたのです。

よく皆さんも覚えておられるように「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。」（ヘブル 11 : 6）の通りです。ここで教えるのは、神に喜ばれる信仰は（1）神がおられることを信じること、真の神がおられ、この聖書の神こそが真の神であると信じるのが神に喜ばれることだと言います。同時に、（2）神を求める者には報いてくださる方であると信じること、つまり、神は約束されたことは必ず守られる方だと、その信仰を神は喜ばれるのです。どんなときでも神を信頼して揺るがない信頼をもって歩み続けること、そのような信仰を神は喜んでくださると、それがこのヘブル 11 : 6 に記されていることです。エペソ教会のクリスチャンたちはそのように主に信頼を置いて歩み続けていたのです。だから、神は喜んでおられました。

3) 主のみことばに忠実に従った歩み : 「その偽りを見抜いた」、どんなときにも神のみことばに忠実に歩んでいた、それがエペソ教会のクリスチャンたちでした。2 節の続きに「また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。」とあります。彼らの「偽りを見抜いた」と、どのような人たちだったのか？「使徒と自称しているが実はそうでない者たち」と、まさに、偽りの教師たち、偽善者です。そのような人たちが教会に入り込んで来て、教会の中にいろいろと問題を起すのです。そこで、このエペソのクリスチャンたちはその人たちを「ためして」と書かれています。「ためして」とは「試験する、吟味する」ということです。

彼らの言っていることが本当に聖書が教えている通りなのか？彼らの話すことが聖書と一致しているのかどうか？と、エペソのクリスチャンたちはそのように試験したのです。ですから、彼らはそのような霊的識別力をもっていたのです。今、それが必要です。惑わす者たちがたくさんいて、惑わされている人たちもいっぱいいます。だから、みことばを知らなければいけないのです。神が何とされているのか？そのことをしっかり知ってそのみことばに立たなければなりません。エペソのクリスチャンたちはまさにそうでした。

パウロはこのエペソの長老たちに警告を發しました。使徒の働き 20 章に書かれています。使徒 20 : 29 「私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。」と。エペソ教会の人たちはどうだったのか？確かに、狼は来たでしょう。困難をもたらそうとしたでしょう。でも、彼らはそのようなものに惑わされることはなかったのです。「その偽りを見抜いた」と大変な信仰者でした。もちろん、「エペソ人への手紙」を見ると、彼らがどれ程聖書の知識においても優れていたかをいうことが分かります。だから、偽りの者に対して正しくそれらを吟味しました。エペソ 4 : 27 には「悪魔に機会を与えないようにしなさい。」と書かれています。偽りの教師たちの間違った教えを拒否し、みことばの教えに反することを拒んだのです。

この入り込んで来た誤った教えについて、6 節にこのように書かれています。「しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行いを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。」と。「ニコライ派の人々」とあります。実は、ペルガモ教会へのメッセージにもこの「ニコライ派の教え」とあります。結論を言うなら、彼らはどのようなことを教えていたのかははっきりとした確証はありません。様々な推測はあります。レオン・モーリスという神学者はこのニコライ派に関して、黙示録の最初の注解者ベッタウのヴィクトリアヌスの推測を記しています。これは黙示録の注解書を最初に書いた人物の推測です。「彼ら（ニコライ派）は偽りの厄介者で、ニコラウスの名のもとに聖職者であり、自分で異端を作り出し、偶像に捧げられたものは厄払いしてから食べられる。また、姦淫をした者はだれでも八日目に平安を受け取るなどと主張した。」と、このようなことを教えていた人たちであろうと推測しているのです。また、モーリス師は「彼らは偶像に捧げたものを食べさせることや、不品行を行わせることへの奨励を教えるものであったろう。」と、これも推測です。大体、このニコライ派の人たちの教えがどんなに間違っていたのかが分かります。また、モーリス師は神学者バークレーのことばを引用してこのようにも言っています。「キリスト教を滅ぼそうとしているのではなく、キリスト教を改良し現代風にしたものを提示していた。」と。

彼らは不品行を行なうことに関しても、偶像に捧げた食べ物を食べることにしても、聖書と違う教えを教会の中にもたらしていたのです。非常に興味深いことは、彼らはキリスト教を滅ぼそうとしていたのではなく、キリスト教を改良して現代風なものにしようとしていたということです。もし、そうなら、なぜ、教会が現代風にならなければいけないのでしょうか？神のみことばは完成された啓示です。付

け足してもならないし、取り除いてもならない、時代を越えて神が私たち人間に与えられたメッセージです。どの時代でも、信仰者に与えられた責任は神のことばを正しく学ぶことです。それ以外に何が必要ですか？でも、そのような教えが教会の中に入り込んでいたのです。このエペソの教会は彼らの間違いを見抜いて「彼らの行いを憎んでいる」と、主が憎んでおられるように、このような異端の働きを憎んでいたと6節に記されています。ですから、神のみことばに忠実に従おうとした教会であったと、そのように言えます。

4) 主への献身的な歩み : 3節

そのことが称賛されています。3節に「あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。」と、このように書かれています。この「耐え忍び」ということばと2節の「がまんする」ということばは同じことばです。ですから、彼らは信仰者として忠実に主に従い続けたが、いろいろな迫害、困難に会った。でも、その中で彼らは耐え忍びがまんし続けたと言うのです。しっかりと主に従い続けたのです。なぜ、そのように歩み続けることができたのか？そのことも書かれています。「わたしの名のために」とあります。彼らはだれのために生きていたのかをしっかりと覚えていたのです。

彼らは新しく生まれ変わった者として、何のために、だれのために生きているのかをしっかりと知っていました。救われる前の自分は自分のために生きていました。自分の思い通りに生きて自分を楽しませればそれでいいと…。でも、救われた私たちはそれとは全く違う生き方を始めました。自分ではなく、神をどうすれば喜ばせ楽しませることができるのか？何が神の前に喜ばれることなのか？とそのことを考えて生きる者へ生まれ変わっているのです。ですから、彼らは信仰ゆえに大変な迫害を受けたとしても「私は主のために生きている」と言って主に従い続けたのです。

「疲れたことがなかった。」と記されていますが、これは2節に書かれている「労苦」と同じことばが使われています。大変な中で、彼らは額に汗しながらクタクタになるまで主に従い続けていたのです。なぜなら、彼らはだれのために自分は生きているのか？そのことをしっかりと覚えていたからです。まさに、パウロがエペソ教会の長老たちに話した通りです。使徒20：19-24「:19 私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。:20 益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、:21 ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。:22 いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわかりません。:23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみ私が私を待っているとと言われることです。:24 けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」

パウロは言います。「私が生きるか死ぬかなどはどうでもいい。私の関心は神から与えられた務めを忠実に果たし終えることができるかどうかだ。」と、それ以外のことは考えていないのです。私たちはどうすればもう少し長く生きることが出来るのか？どうすれば自分を楽しませることができるのか？などに関心を持ちますが、そのような人生はもう終わったのです。神があなたを罪の中から救い出してくださり生まれ変わらせてくださった、本来の目的に生きる者へと私たちを変えてくれたのです。私たちはこの地上にあっていつ天に召されるか分かりませんが、その日まで、主を喜ばせる行いを継続しながら、主に喜んでいただくことだけを私たちの喜びとして生きていく、そのような人へと造り変えられた、それがクリスチャンです。だから、みことばが繰り返して「このように生きていきなさい。これが主のみこころです。これが主が喜ばれることです。」と教えているのです。そして、感謝なことに、そのことを実践する助け主、聖霊が与えられました。その助けをいただきながら私たちは生きていくのです。

パウロのことばをもう少し見ましょう。ピリピ1：20、21「:20 それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」、使徒の働き21：13「するとパウロは、「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています」と答えた。」

このエペソ教会のクリスチャンたちは大変な苦しみの中にあっても、疲れることなく前へと進み続けたのです。立ち止まったり、後ずさりしなかったのです。彼らは神を信頼して前に進んでいくのです。もちろん、信仰者として生きていくことは楽なことではありません。恐らく、皆さんの中でも一回位はよぎることがあるでしょう。「もう少し後に信仰を持てばよかったかな？」と、そのように思った人がおられるかも知れません。なぜなら、この国にあってクリスチャンとして正しく生きようとするなら、摩擦がたくさん出て来るからです。エペソのクリスチャンたちもそれを経験していたのです。でも、彼らはその中であって「いろいろな迫害があったとしても、問題があったとしても、新しく生まれ変わっ

た者として私はこの主に従い続けていく」と決心したのです。

そのような働きをしている人たちに対して、パウロは次のような約束を与えています。Iコリント 15:58「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。」と。あなたがたが喜んで主に従い続けていくなれば、その労苦は神の前に立つ時に大きな祝福になるのです。もう一つ、私たちが覚えるべきことは、確かに、地上にあっていろいろな試練があつても、その中であなたが忠実に主に従うなら、あなたが一番喜ばせたい主が喜んでおられるということです。私たちはそのために生きているのです。何度も学んで来ているように、私たちが喜びをもって生きるためにすべきことは、主を喜ばせることです。そうするならば、私たちも喜ぶのです。非常にシンプルなことです。ですから、彼らはそのようにして歩んで神を喜ばせていました。だから、主はこの人たちの行いを誉められたのです。

そのことを見るだけでも、大変な信仰者だったことが分かります。私たちはこのエペソ教会のクリスチャンたちに対して、何か非難できるのでしょうか？主はそのすべてを知っているとわれ、彼らを大いに喜ばれたのです。

2. 非難 4節

さて、4節には、こんなにすばらしい教会であるのに非難するところがあると書かれています。「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」と。主が言われることは、このようにすばらしい教会であっても、彼らは救われたときに持っていた「主に対する初めの愛」から離れてしまったということです。このように例えることが出来ます。外見上は非常に健康に見えるのに、内側は病魔がからだを蝕んでいた、しかも、心臓を蝕んでいたと。このエペソ教会は外見上はとてもすばらしい教会です。でも、その一番中心的な心臓部分を信仰の病魔が蝕んでいたのです。

皆さん、少しこのエペソ教会のことを描いてください。想像力を働かせてください。この教会には正統的な教理を教える教師たちがいました。この群れは信仰による迫害の中、忠実に主に信頼しながら歩んでいました。みことばに反する教えに妥協することなく、献身的に歩み続けていました。それでいて、教会の中には救われていた時に持っていた主への愛や感謝がすでに過去のものになってしまった人たちがいたのです。そして、その信仰の病魔は感染力の強い伝染病のように、教会全体に影響を及ぼしていたのです。かつて、この教会も主への愛や感謝が原動力になっていたことでしょう。それにも拘わらず、いつの間にか、その原動力を失ってしまったのです。これがエペソ教会だったのです。非常に悲しい、また、恐ろしいことです。

サタンはそのことを望んでいます。サタンはあなたがたをそのような教会に、そのようなクリスチャンになることを望んでいます。パウロはエペソ人にメッセージを送りますが、エペソ人への手紙の6:11から「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。」と記しています。なぜ、パウロはこのようなメッセージを送ったのか？彼は分かっていたのです。神に忠実に従うことを神は喜ばれるが、偽りの神であるサタンはそれを喜ばないのです。何とかその信仰者の信仰を弱らせようとするし、忠実さを目指している教会を何とか悪の働きをもって教会にダメージを与えようとするのです。

エペソ教会、すばらしい教会でした。でも、一番肝心な神への愛が薄れてしまったのです。そのような教会は存在するし、私たちの教会がそのようになっていないことを望みます。どのような教会か？皆さん分かりますね？律法的にはすばらしい正統派の教会かもしれないけれど、その教会にいのちがなくなってしまうのです。まさに、このエペソの教会は岐路に立っていました。そこで、この後を見ると、主はエペソ教会に警告を与えるのですが、同時に、彼らにあわれみも与えておられます。やり直すチャンスを与えられたのです。

3. 警告 : 神の愛 5節

「それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。」と、ここで主はこのような状態にあつてどうすればいいのかを教えています。「この三つのことをやりなさい。そうすればあなたたちはもう一度わたしの祝福の中に戻ることができる。」と。そのことを今から見ていきますが、これはエペソ教会だけのことではありません。私たち信仰者ひとり一人がそのことを考えなければいけません。教会でいろいろな働きをしてもその心がどうか？ということ。いつの間にか、かつて持っていた思いが冷めてしまっていないかどうか？もし、そうなら、この神のメッセージを聞いてください。

1) どこから落ちたのかを思い出す : この「思い出す」という動詞は現在形です。継続してやりなさいと言うのです。何を思い出し続けるのか？かつてあなたが神とともに歩んでいた時、もっと言えば、イエスを信じて喜びに満たされていたとき、その時のことを思い出し続けていきなさいと言うのです。主イエス・キリストを信じてその救いに与ったとき、あなたは間違いなく、主を愛して主のために何で

もしたいという思いをもってはいたはずで、救われた喜びがあなたの心を支配して、あなたの心から主に対する賛美と喜びが湧き上がっていた、そのときのことを思い出していきなさいと言うのです。日曜日が待ち遠しくて仕方がなかった、早く皆と一っしょに礼拝をささげたいとそのことを待ち望んでいた、そのときのことを、また、聖書が学べる機会、聖書の勉強会や家庭集会、信仰の友などの集会に参加して、神のこともっと学びたいと思って歩んでいた時のことをずっと思い出しなさいと。あの放蕩息子が罪のどん底にいたとき、自分が父親と一っしょにいたときのことを思い起こして、そして、彼は立ち返ります。

みことばが私たちに教えていることは、もし、私たちが主に喜ばれる者になりたいとするなら、大切なことは、私たちが主を信じて主を喜び主に感謝をささげていた、そのときのことを思っていることです。そのときに私たちが持っていた満足、喜びは、この世のいかなるものをもっても得ることのできないものだったから、そのことを思い出しなさいと、それが一つ目です。

2) 悔い改めて : この「悔い改めて」という動詞は「罪との関係をきっぱりと切りなさい」ということを意味する時制が使われています。ですから、二つ目に言われたことは「罪から離れなさい」、罪の中を歩んでいながら神を喜ばせることは絶対にできない、どんなに小さな罪でもそれがあなたの心の中に居座り続けることを許してはいけないということです。その罪をすべてあなたのうちから除きなさいと言います。少なくとも、私たち信仰者はこのような祈りを主の前にささげることができると思いませんか? 「主よ、私はかつて持っていたあなたへの愛から離れてしまいました。赦してください。これまでと同じように奉仕をして集会にも出席していましたが、心が伴っていませんでした。赦してください。いろいろな理由を付けていつの間にか奉仕も止めてしまっていた私を赦してください。あなたが今日、私にこの日をくださった。それはあなたが私を用いてくださるためです。自分でできる、できないを判断するのではなく、主よどうぞ使ってくださいという願いをもって、自らをささげていく、かつてはそのように生きていたのに…、そんな思いがいつの間になくなってしまっていた。主よ、私を赦してください。」と。主はここで本当の悔い改めを教えてください。悔い改めはただ「ごめんなさい」と言うことではありません。自分がやって来た過ちを認めて正しい方向を向いて歩み出すことです。

3) 初めの行いをしなさい : 今、あなたは正しい行いをしているかもしれないけれど、問題は、あなたの心が正しくないと言われます。それなら、正しい行いを正しい心をもって行っていきなさいと。かつてあなたが喜んでいたみことばを学ぶことを今一度行っていきなさい、兄弟姉妹と祈ることが喜びだった、それならそれを行っていきなさい、喜びをもってささげていた礼拝、それを今から実行しなさい、その当時はいろいろな人に関心をもって、それならそれを今から始めなさい、その当時は一生懸命キリストの福音を語っていた、それなら今からそれを始めていきなさいと。あなたが初めに行っていたそのわざを再び行いなさいと言うのです。

このメッセージを主はエペソの教会に送ったのです。もし、あなたがそれをするなら、あなたは祝福を失うことがないと。

4. 警告 : 悔い改めを拒む者への警告

でも、5節の続きを見てください。「もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」と警告です。二つのことが言われています。

1) 燭台を除く : 燭台は光を保ちます。つまり、「燭台を除く」というのは「証を除く」ということです。私たち教会はこの世に向かってキリストを証します。そのすばらしい証に影響が及ぶのです。教会から除かれてしまうと、大変恐ろしい警告が記されています。教会に入って来てもだれ一人としてキリストを見ることがない、クリスチャンである私たちが一般の人たちと接していても、人々は私たちにキリストを見ない、世の集まりの方がここよりずっといいと。その原因はどこにあるのか?

イエスは言われます。もし、あなたが悔い改めないなら証を失うと。

2) 燭台を置かれた所から取り外してしまふ : つまり、教会の存在自体がなくなるということです。今はもうエペソ教会は存在していません。取り除かれてしまったのです。

このような警告を主は与えました。では、あなたはどのような選択をするのか?

C. 教会に対する勧告と約束 7節

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」』、

1. 祝福への招き : 「耳のある者は……聞きなさい。」と。「諸教会」とは複数形です。エペソだけでなく、すべての教会に対する勧めです。みことばに、主の教えに耳を傾けなさいと。

2. 祝福の約束 : 「勝利を得る者」とは救われた人たちのことです。私たちはこの世にあって世に打ち勝った者たちです。Iヨハネ5:4-5がそのように教えてください。「:4 なぜなら、神によって生まれ

た者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。:5 世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。」、救われた者、勝利を得た者たちに何が約束されたか？「神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」と、その人は神のパラダイス、天国にあって永遠のいのちをもって過ごすということです。それが祝福として約束されているのです。

結び :

あなたは、救われたときに持っていた主への愛が冷めることなく、燃え続けているか？

救われたことを日々感謝しながら歩んでいるか？

I ヨハネ 2 : 15 「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」

このエペソ教会に対する手紙は、私たちひとり一人が考えなければいけないことです。私は主に對してどのように歩んでいるのか？私の信仰は成長しているのかどうか？もっと言うなら、主に對する愛は増し加わっているのか？それは私たちの生き方に反映されます。集会に對して熱心ですか？礼拝に出て来るときに、私たちはこの礼拝に備えて十分に休息をとっていますか？あなたの心を見ておられる神の前にこうして皆が集まって立つのです。あなたがどのような思いをもってこの場に来ているのか？もし、初めの愛をもっているなら、感謝をもって、喜びをもって、「主よ、ありがとう！！私のような者を救ってください…、私のような者といつものもにいてくださって…、こうしてこの場が与えられたことを感謝します。」と、そのような喜びをもって賛美をしていなくても心の中から感謝が湧き上がって来ます。もし、あなたがそうなら、あなたは初めの愛を忘れていません。

でも、何となくこの場に来て、奉仕も同じようにずっとしているからと、もしそうなら、あなたの心をご覧になっている神はあなたを非難されるかもしれません。もう一度、思い出してください。悔い改めることです。初めの行いをするのです。その時に主はあなたを祝してくださいます。

どうぞ、その選択をもって、もし、私は変わらなければいけないと思っている方がおられるなら「主よ、今日、私は変わりたいです。初めの愛をもってあなたに従っていきたい。そうしてこの人生を全うしたい。」と、その思いをもってみことばが教えることを実践してください。主はあなたを変えてくださり、あなたを用いてくださり、あなたを祝してくださる。

どうぞ、このメッセージに對して「関係ない」と耳をふさがないでください。大変厳しいメッセージです。でも、神にはそれを語る権利があります。神は私たちの心を知っておられるからです。この方に對して私たちは責任があるのです。主の前に正しい歩みをもって主の栄光を現わしていきましょう。

《考えましょう》

1. 主がエペソ教会を称賛された四つのことを挙げてください。
2. 「初めの愛から離れてしまった」とはどういうことを説明してください。
3. どうしてそのようなことが起こるのだと思いますか？
4. 「初めの愛から離れない」ためには、どうすれば良いと思いますか？